

教職員・院生版生協だより

送別特集号

発行 名大生協理事会
編集 名大生協教職員委員会
☎ 学内線 7540, 学外線 781-1111

かけはし

それぞれの思い出

—退職される教職員の方々から—

この春もまた、多くの教職員の方々が定年（停年）を迎えられ、名古屋大学を去って行かれます。長い間、ご苦労様でした。みなさまにとって名古屋大学で過ごした年月は、人生の貴重な時間であったことでしょう。

今回、みなさまの名古屋大学で過ごした「それぞれの思い出」を、寄せていただくことができました。みなさまの貴重な体験を教訓にさせていただきます。ありがとうございました。

2007年3月

名古屋大学消費生活協同組合・教職員委員会

退職されるみなさまへ

長い間名大生協の組合員として生協をご利用・ご支援いただきましてありがとうございました。みなさまからお預かりしています出資金を活用して生協の運営を行ってまいりました。

名大生協では、退職されるみなさまに「名大生協後援会」への加入・移行をお勧めいたします。後援会員は、退職後も引き続き生協のお店や各種サービスをご利用いただけます。詳しいことは、下記組合員コーナーまでお尋ねください。また、名大生協を脱退されるみなさまには出資金をお返しいたします。

「後援会」への加入、および脱退の手続きは、お手数ですが印鑑と組合員証、また、「出資金預り証」の発行を受けた方はそれも一緒に持参の上、組合員コーナー（北部厚生会館2階、内線7540）までお越しください。

台湾；生協；パスポート



井口 昭久（医学部附属病院・教員）

私は3回台湾へ行く機会があったが3回とも台湾へ行きそこなった。その中の1回は生協にも責任があった。

まず1回目。時は10年ほど前、私が教授になったばかりの頃である。大学時代の友人が二人、台湾でゴルフをするからお前も一緒に来ないか、ということで、私も出かけることにした。年休を取って金曜日に出発する予定であった。友人の妻が一切の手配をしてくれて私はゴルフバックを持って、空港へ行けばよいことになっていた。私にしては早めに出かけ、空港で二人が来るのを待った。久しぶりの休暇で心は浮き浮きしていた。友人が持ってきてくれた飛行機の搭乗券を持ってカウンターへ行った。しばらく待っていると、受付の女の子が私に聞いてきた。「パスポートを出してください」私はびっくりした。「台湾へ行くのにパスポートがあるの？」受付嬢はあっけにとられた顔をしていた。出発の時間が迫っていて、家に取りに行く時間がない。仕方がないので、当時我が医学部の学生であった息子にパスポートを持ってくるように頼んだ。電話口で息子が言った。「授業に出なくちゃならないんだけどな」私は言った。「授業など出なくてもいい」そのとき私は医学部教育委員の委員長であった。息子も間に合わなくて、結局私はゴルフバックを抱えて大学の医局へ出勤した。

2回目。台湾の学会から招待されて講演をすることになった。前回の失敗に懲りて

そのときは自分で手配をした。一切を生協に頼んだ。出発は土曜日であった。カウンターで私は悠々としてパスポートを出した。しかし受付嬢の顔が何となく冴えない。今回は自信满满である私にその女の子は言った。「お客さん、台湾へ行くにはパスポートの有効期限が6ヶ月必要であります。お客さんのは4ヶ月しかありません」私は焦った。私は焦って大使館へ電話しようとした。しかし土曜日では大使館は休みである。今から思うに大使館へ電話しても無意味であったと思うが。私は誰もいない土曜日の医局へすげすげ戻った。そこへ医局員のS先生が現れた。私は無理を承知で言ってみた。「先生これから台湾へ行って講演してきてくれない」彼は言った。「いいですよ」彼はそれからタクシーに乗って空港へ行って、台湾で講演をして次の日に私への台湾からのお土産を背負って帰ってきた。

後日、私は生協に文句を言った。生協の人たちも神妙に謝ってくれた。責任者を出せといいたくなって、私は気がついた。そのとき私は医学部生協の理事であり、私が最高責任者であった。

3回目。前述の悪友2人に再び誘われた。準備ばたん、今回こそ。準備し終えた時にダブルブッキングに気がついた。妻との先約があった。妻の激怒を買って、そして離婚。それほどまでにしてゆくところでもあるまいと思い、止めにした。

(いぐち・あきひさ)



名古屋大学の思い出

伊藤 秀章（エコトピア科学研究所・教員）

名古屋大学の東山キャンパスには、学生時代も含めると40年間通いました。その自然環境や、建物の景観、学生・職員のライフスタイルも大きな変貌をとげました。とくにここ数年間のキャンパス内の新築・改修ラッシュは激しく、キャンパスを久しぶりに訪れるかたが異口同音に「名大は変わった」と語っています。一方、学生や職員のライフスタイルはどうかというと、それぞれが情報・通信処理や評価活動で忙しくなったほかには、とりたてて大きな変化は認められないのではないのでしょうか。新しい革袋には、新しいお酒を入れる必要があるのかもしれませんが。

ところで海外の大学に目を転じますと、それぞれが独自のキャンパスプランをもち、地域のなかで大学の個性を存分に発揮している大学が少なくありません。私は若い頃ボストンに客員研究員としてマサチューセッツ工科大学(MIT)で一年半ほど過ごしたことがあります。MITもハーバード大学も大学の歴史や建学精神に根ざしたユニークなキャンパスの風貌を擁していることに大きな感銘を覚えました。また、数年前にイギリスのSouthamptonに近いウェセックス工科大学を訪ねたときには、大きな森と美しい庭園に囲まれた欧風民家のような校舎が点在する光景を大学人も誇りに感じている様子でした。

日本の大学にも大変魅力的なキャンパスをもつ大学が増えてきました。それは独自の建学精神をもつ私立大学に多いのですが、国立大学法人もそれぞれの地域の特徴と大

学のミッションにふさわしいキャンパス景観を創造することを願っています。名古屋大学には比較的広い面積のキャンパスがあり、林や緑地も残されていますが、全体のキャンパスプランは部局間の利害もからみ、構成員の十分な議論と合意を経て進んでいるようには見えません。私の研究室はキャンパスの東端に位置する共同教育研究施設地区のエコトピア科学研究所にありますが、大学内の他部局へのアクセスは不便であり、そのゾーニングは必ずしも合理的に設計されているとは思えません。

大学にはゆっくり思索にふける静かな散策道やジョギングコース、またカフェで飲み物を片手にディスカッションをしたり、レストランで食事をしながら談笑したりする自由空間が必要です。最近「グリーンサロン東山」の周辺はその雰囲気醸し出しています。リフレッシュ空間を維持するためには、大学内の自動車や二輪車の交通は適度に制限することが必要です。

大学周辺地域との交流も重要な要素であり、オックスフォード大学や早稲田大学の界限のように、大学構内と市街地のマッチングを図り、市民生活にとけ込んだキャンパス設計が望まれます。また、国際交流は総合大学の任務としては重要な位置を占めますので、ゲストハウスの充実や、数個のセッションが併設できる大きな国際会議場の建設が期待されます。国の予算では早期建設が難しい状況ですから、寄附団体の名称を冠とするこの種の建物もぜひ実現して頂きたいと思います。(いとう・ひであき)

生協と私



鶴飼 モト美 (総合保健体育科学センター・職員)

1966年、私が名古屋大学医学部附属病院に勤務し、映画でしか見たことのなかった、大学の生協というものを利用したときは、「ああ大学なんだ。」と今思えば本当に田舎者の感想であるが感慨深かったことを今でも覚えています。

生協ラーメン一袋確か10円だったとおもうが、1箱買って、何も具のないラーメンで一食すまることが多かった。書籍部で初めて共産党宣言を購入し、一緒にいた婦長さんから「なんだおまえは赤か」と言われて、何を言ってるのかわからなくて、「学校で一度は読めと言われた本だもん」と、今思えば全く何も知らない人間だったなーとわらってしまうことがある。

というように私の田舎からみたら、大学も生協も雲の上、映画の中の世界だったわけだからなんと言われても自分は全く何とも思っていなかった。

時は学園紛争に突入していく前の時代だから、世の中は騒がしかった。好むと好まざるに関わらず、何も知らない自分たちも、時代の流れにどんどん押し流される時代だった。

そのころの、生協の職員は、仲間といっしょで、保育所運動も、一緒だったとおもう。

仲間意識があって、ここのところ生協が大きくなりすぎて、顔も名前も知らないのが普通になってしまって、ずいぶん寂しい気持ちになっているけれど……。

東山構内に異動してからは、ハイキングやりんご・ミカンの産直場の視察など、酒造場にも行ったなー。本当に生協の教職員の委員のかたにはお世話になりました。

生協は、苦学生や私のような下宿して働く者のとってなくてはならないものであった。

いま、大きく社会はかわって、大学も、学生も様変わりしている。

便利さと、自分にとって使い勝手の良い生協を利用するだけになってきているような気がする。一緒に生協を盛り上げ、一緒に生活を守る運動をする場所ではなくなったようなそんな気がしている。

団塊世代といわれる私たちが、ここ数年で大学から職場から去っていく。このままでいいとはとても思えない状況を残したままで、とても申し訳ない気がする。

といいながらも、今年定年を迎える自分にとっては、生協には本当にお世話になった。

楽しい思い出の方が多いし、購買の方にも結構言いたいことを言って、良く聞いていただいた。感謝いたします。

ますます、厳しくなる法人化後の生協活動になるだろうとおもいますが、原点を忘れないで職員のかたも頑張ってください。

生協委員の方本当にありがとうございました(生協の職員とまちがえていた方本当にごめんなさい)。(うかい・もとみ)

名大生協の思い出



加藤 公子（事務局・職員）

私が就職したのは昭和40年で、職場は鶴舞キャンパスにある病院でした。当時医学部の生協食堂は、昭和の初期に建てられたと思われるその当時でさえも古い建物だったと記憶しています。先輩に連れて行ってもらい、初めての昼食を食べたときの味噌汁の値段が5円だったことは、今でもハッキリ覚えています。うどんも、かまぼこと確か自分で欲しい量を入れることができるねぎだけだったと思いますが15円という値段はやはり覚えています。薄給の身でも安いと感じたからだと思います。それから何年か後その建物（確か会館と呼ばれていたような、、、）は取り壊され、医学部の図書館の一階に店舗と食堂それに小さな喫茶店ができて、立派になったものだと思います。

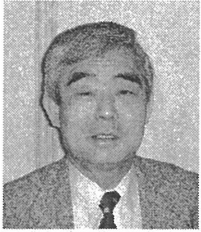
それから何年か後に結婚し、年末には生協から来るパンフレットの大きな大きな注文表で、お正月用品のお餅からみかん、りんご、おせち等々”ああでもない、こうでもない”と思いつつ注文したのを懐かしく思い出します。

ボーナスシーズンには、豊田講堂で大きなセール（確か虹のセール？）があり、子

供達も楽しみにしていて、日曜日には一家で買い物をしたものでした。

医学部の店舗は小規模だったので、職員の方みなさんと顔見知りで、一言二言お話ししたりして店舗に行くのが楽しかった記憶があります。クリーニングは、鶴舞ではお願いする内容を自分で全部書いて、仕上がり後に料金を払いながら受け取るという方式だったので間違いのないように気を付けていたのが思い出されます。東山キャンパスに異動して来たら対面だったので、やはり何か安心感がありました。

約15年在籍した水圏科学研究所時代は、学会があると食堂での懇親会の依頼、研究所全体の忘年会でのデリバリーサービス、研究成果等の印刷物、備品購入等色々お世話になったものだと今更ながら思います。ここ5年間は、生協から離れた場所に勤務していることもあり、少しご無沙汰状態ですが、学生と職員のための生協としてきめの細かいサービスで益々発展されることを祈っています。そして、私達OBも気軽に立ち寄って買い物をしたり、食事ができる生協であって下さい。（かとう・きみこ）



科学技術とは

上出 洋介 (太陽地球環境研究所・教員)

振り返ってみますと、フルタイムとして在職した機関は、外国、私立大を含め、今まで8箇所。最後の名古屋大学には、結局一番長く“滞在”したことになります。最近感じることを書いてみたいと思います。

科学技術という言葉は、メディアで接しない日がないくらいポピュラーな語です。新年の新聞の見出しだけでも、「科学技術振興費1.1%増」、「科学技術を支える人材育成を」(文部科学大臣)、「イノベーション創出のための科学技術」(科学技術政策担当内閣府特命大臣)と並んでいます。日本の歴史と風土を愛することを「美しい日本づくり」というのは、具体性がなくわかりにくいのですが、科学技術と言う言葉は、具体的すぎて誤解を招くようです。第3期科学技術基本計画策定をめぐるのは、総合科学技術会議を頂点として、産業界までを含んで各界で議論が盛んになりました。科学技術創造立国を目指して始まったこの基本計画に関し、いろいろな団体から意見を聴取されたものです。おまけに、技術科学という語まであり(たとえば、豊橋技術科学大学)、事態はますます混乱します。

そもそも科学技術とは、「科学(サイエンス)と技術(テクノロジー)」のことはずです。曖昧さを特徴とする日本語で、「科学と技術」とははっきり書かないために、国の予算をコントロールする政治家の中には、「科学技術とは、科学を使った技術」、つまり、「科学技術とは、技術のこと」と思い込んでいる方が多いのではないのでしょうか。政治家に限らず、世の中のほとんどの人も、「科学も技術も同じもの」と思っているようです。

科学は「私たちのおかれている自然を知りたい」から出発し、技術は「私たちの生活をより便

利にしたい」という欲求から始まっています。科学を大事に育てずに、技術面だけを強調すれば、科学技術基本計画が目的とする「知の創造により世界に貢献すること」が達成されないばかりか、技術革新すら実現できず、技術が単なる工夫に終わってしまう危険さえあることを悟るべきです。確かに、私たちの生活は携帯電話、デジカメなど、日々発達する便利な器械に囲まれていて、勘違いをするのも無理はないのかも知れませんが。コンピュータの発達のおかげで私の研究分野も急速な発展を遂げましたし、医療技術の発達は多くの命を救いました。人間はもっと楽をするための技術を欲しいと願うものですし、資源のない日本は、技術によって得られた付加価値の高い製品を世界に売って生計を立てなければならないと考えるのも仕方ありません。しかし、技術開発の実現は、科学の発達があってこそだということを忘れてはならないと思います。中長期的には、科学と技術のバランスが大事なのです。

今までの科学技術には、「科学」という視点が軽視されているように感じます。発見と発明。基礎研究と応用研究。確かに、いろいろな言葉の組み合わせが使われており、科学と技術は1本の線で簡単に区別できるものではありません。しかし、地球のことをよく知らずに、「地球にやさしく」と叫んでも、地球にとっては有難迷惑なことでしょう。地球のことをよく知ること、エネルギー源である太陽にまで遡って「科学」することなしに、本当の意味の地球環境問題は解決できないでしょう。後手に廻るだけの環境保全に多額の調査資金を出しているのみで、「地球を知ろう」という基礎科学をおろそかにすれば、孫の代になって後悔することになると思います。

(かみで・ようすけ)



岐路に立つ生協

北住 炯一（法学研究科・教員）

1963年4月はじめ、入学したての私は大学食堂を初めて利用した。箸が見つからず、不慣れなナイフとフォークを緊張の面持ちで使う羽目になったが、ふと目をあげると何とテーブル中央に箸があるではないか。そこで正直救われた気になったというまことに「純朴」な経験が、生協との初の出会いであった。

爾来40年以上生協にお世話になり、今も週3、4日は北部生協で夕食をとっている。この意味で、私は生協の熱烈なサポーターであるのかもしれない。生協は、最近も理系地区の施設刷新を行ったように、学内における福利厚生上の重要な役割を果たすべく、キャンパスの求めに応えようとしている。

さて、定年をむかえる機会に、生協への期待・注文を記したい。第一に、夕食献立の一層の改善である。告白すれば、以前は消去法でメニューを選択した。最近はそうでもないが、食欲を誘うメニューに限りなく近づけてほしいものである。第二に、需要の多様性に対応する品揃えである。一例を挙げれば、私は毎日研究室で緑茶をよく飲むが、しばらくの間、お茶パックしか買えないことが続いた。ニーズがないからと

の説明であった。限られた陳列棚では余裕がないのであろうが、工夫を望みたい。第三に、工学部内の軽食コーナーの充実である。開店時にはよく利用したいと思ったが、いささか期待はずれの感を抱いている。第四に、北部生協の書籍コーナーの一部復活である。四谷通りを横断して理系施設に行けば書籍は手に入る。しかし生協書籍は大学文化の顔である。ニーズ調査が必要であらうが、復活の可能性はないのだろうか。

ところで気になるのは、生協の将来である。教養教育院のまえにコンビニが開店し、営業は好調に見える。これをきっかけに思うのであるが、規制緩和と市場原理の徹底という今日的な社会状況から、はたして大学生協は自由なのであろうか。これまで生協は大学内の独占的存在であったし、それは学内コンセンサスによって支えられていた。しかし、今後大学内での競争原理が避けられないとすれば、生協は利用者の若い感覚とニーズを捉え、プロの手法を取り入れ、そして外部評価システムを導入しながら、ビジネスチャンスを開き戦略的展望を明確にする必要があるのではなからうか。私の人生の一部でもあった生協が、ますます発展するよう祈りたい。

（きたずみ・けいいち）

元気な学生と元気な大学



柴田 敏之（全学技術センター・職員）

昨年5月までの十数年間、名大生協の理事と教職員委員会委員を務めました。その間、大学生協東海地域センターの役員や、全国大学生協連合会の理事を務める機会をいただき、私の視野を広げるよい機会を与えてくださったことに感謝しています。この経験をこれからの私の人生に生かしていきたいと思っています。

はじめて名大生協の理事会に出席したときの「感動」は、いまもよく覚えています。学生・院生・留学生・教職員・生協職員あわせて100人近い人たちが一堂に会し活発な議論を行う姿、特に元気な学生の姿は久しぶりに見る光景でした。学生（院生）自治組織の活動が低調になっているとき、生協のもとに集まる学生たちの自主的で活発な活動を頼もしく感じたものです。以来毎月開かれる理事会が楽しみなものになりました。

かつて加藤延夫先生（当時名古屋大学史編集委員会委員長、後に総長）は、大学の進歩の歴史は、学長や役員など幹部がつくるものではなく、学生や教職員など全構成員の意思と運動によってつくられてきた、と講演で語られました。

全構成員の意思と運動によって制定された名古屋大学平和憲章は、「名古屋大学は、

自由闊達で清新な学風、大学の管理運営への全構成員の自覚的参加と自治、各学問分野の協力と調和ある学風への志向という誇るべき伝統を築いてきた」（1987年2月5日）とっています。宣言から20年後の現在、その伝統はどうなったでしょうか。

「勝ち組、負け組」をつくり出す「格差社会」の中で生きていくにはどうしたらよいでしょう。私は生協の理念―「1人はみんなのために、みんなは1人のために」という協同の精神の中に活路があると思います。

十数年前、私が「感動」した学生たちの活発な活動は現在に受け継がれ、さらに充実してきています。受験生の不安を減らすために親切できめ細かい対応、入学後の慣れない新入生へのガイダンスや相談活動、真夏に開かれるオープンキャンパスでは、暑さを厭わず高校生への親身なガイド。こうした活動は学生にしかできません。このような学生たちの自発的で献身的な活動に支えられ、大学運営や教育が可能になっていることを、教職員に知っていただきたいと思っています。

名古屋大学を元気にするため貢献している元気な学生たちがいます。名大生協に集う元気な学生たちの姿の中に、名古屋大学の未来があるような気がしています。

（しばた・としゆき）

名古屋大学の思い出



竹内 弘行 (文学研究科・教員)

私が本学の大学院に入ったのは、1970年4月でした。当時は、いわゆる「70年安保」の大学紛争の最中でした。紛争自体は、前年69年の東大安田講堂の落城ですでに峠を越えていましたが、まだ幾つかの大学で、学生らのバリケードで教室が封鎖されて、授業もままならない状態だったのです。

私のいた愛知教育大学でも、それは経験済みで、その関係もあって就職できずにいて、名古屋大学文学部大学院の中国哲学の門を叩きました。私の指導教授は山下龍二先生で、紛争当時の文学部長でもありました。先生のご専門は、中国明代の思想家・王陽明の研究で、当時すでに有名でした。先生の授業でもっとも興奮したのが、忘れもしない1970年11月25日、三島由紀夫の市ヶ谷陸上自衛隊東部方面総監部での割腹事件の当日です。この日、山下先生を囲んで時を忘れて議論した記憶があります。

『仮面の告白』や『金閣寺』などの小説で名高かった三島由紀夫は、大学紛争にも強い関心をもち、自ら「楯の会」を主催して若者を集めたり、全共闘学生との対話集会以てたりしており、文学者というよりも時

代の行動的批判者でした。しかもその三島が自己の哲学指針として『革命の哲学としての陽明学』を公表していて、日本で陽明学の信奉者、大塩平八郎、西郷隆盛、東郷平八郎などの系譜に自分を位置づけていたのです。当日、授業を忘れて事態の成り行きを論じあったのは、山下先生のご専門が陽明学であり、三島のいう行動的陽明学をどうみるかは、この事件をどう理解するかと、無関係ではなかったからです。

実際、この三島の割腹事件で、改めて世間から陽明学に注目が集まり、山下先生が某誌から取材を受けたり、先生の論文集『陽明学の研究』が世に出たりしました。先生の意見は、三島陽明学は中国の陽明学とはっきり違うというものでした。それは、あの日、授業を放り出して語り合ったことでもあります。幸か不幸か、日本のジャーナリズムは、暫くしてこの話題を忘れてしまいました。それが健全な日本の知的反応でもあったのですが、大学紛争の提起した異議申し立ても、あわせて記憶の彼方に追いやられて、いま思い出するのは、何故か熱く語りあったという記憶だけです。

(たけうち・ひろゆき)

コンサートと託児所



武田 邦彦 (工学研究科・教員)

ボストンの西北に“タフツ大学”という私立大学がある。どちらかというと経済学や会計学の得意な大学でキャンパスは小さいものの大変に美しい。その大学では試験の2週間前になると図書館が24時間営業に変わり、それに合わせて生協の食堂は夜遅くまで食事を提供する。そして試験が終わると学生の生活は一変する。食堂は午後6時から少しのアルコールを提供して学生が試験のことや休みの計画を楽しそうに話している。食堂の隣のホールではこれも生協が有名なアーティストを呼んでコンサートが開かれる。あれほど緊張していた学生の頬も緩んで赤みを帯び、キャンパスの坂道を小走りにホールの方に集まっていく。

中世ヨーロッパで大学が出来た時、学生はまず先生を雇った。でもそれだけでは上手くいかない。勉強するためには教室がいる(施設課)、先生も教えるためには研究しなければならない(事務課)、お腹が減れば食べる(生協食堂)、そして勉学をしたいお母さんには託児所もある(?)。かくして大学は学生、教員、事務、生協が集うところになった。

大学というのは社会から隔絶している。それは「開かれた大学ではない」という意味ではなく、大学は「知を創造し、伝達し、

発信する」という社会的役割を担っているし、「総ての上下関係から解放されている」と言う点で、本来的に隔絶しているのだ。でも人間がすることだからそこには「生活」が存在する。その点では、名古屋大学の生協の戦略は成功しているのだろう。なぜなら、名古屋大学の周辺や本山に学生用の食堂や本屋・文房具店などがほとんど見あたらないからである。学生と教員は生協を信頼し、それが自分たちのものであるということを知り、社会と隔絶している。

しかし、名古屋大学のキャンパスは美しくない。それが唯一、自分の心を暗くする。調和を無視した建物群、植え込みに無造作に縛り付けられている看板、そして道路の交通規制・・・いずれも大学とは相容れないものだ。華美ではないが落ち着いた建物、ブランド品ではないが上品な服装、楽しそうだが騒がしくない食堂、交通規制が無くても常識的に駐車されている車・・・効率と拝金主義が知と情緒を破壊する現代において、名古屋大学にはまだ僅かに本来、大学にあるべきもの、残すべきものの痕跡が残っている。それらを守るためには、学生が爆発しなければならない。教員が声をからさなければならない。そして生協が実現してくれなければならない。

(たけだ・くにひこ)

多くの思い出の場を与えてくれた名大病院



鍋島 俊隆 (医学系研究科・附属病院・教員)

皆さん、1990年元旦に赴任以来17年余大変お世話になり、誠にありがとうございました。

まず初めに名大で思い出に残っているのは今では普通になっています薬剤師の病棟での業務を部員の理解が得られず、無理矢理スタートしたことです。当時、小生は認知症の実験動物モデルの作成を行っており、遠藤英俊先生（現国立長寿医療センター）を初めとする老年科若手の先生方と勉強会をしておりました。その関係で葛谷文男教授が快くベッドサイドへの薬剤師の受け入れを許して下さいました。中尾誠主任（現金城大学薬学部）が担当しました。嚥下が困難な患者さんには胃瘻術が行われ、このような患者さんにはチューブを通して、くすりの投与が行われていますが、直ぐに詰まってしまい、困っておられました。液体に粉体を混合するときにはエマルジョンを作れば流動性が増ことは薬剤師では常識です。できるだけ細かい、均一な粉を作り、液体へ入れて、均一に分散させれば良いわけです。錠剤の粉碎は薬剤部でして、ベッドサイドでは経腸栄養剤をケーキボールに入れて、ハンドミキサーで混ぜれば出来上がりです。臨床現場にはやはり薬剤師を必要としている仕事があったわけです。今では病棟へ行かせないと不満を持つ部員が多い

のは隔世の感がします。

2つ目は「科学的業務を構築する」ことを目標に業務結果を数値化し、統計的に評価して自分たちの業務が本当に意味があったかどうかを明らかにしてきました。これの成果として、薬剤師の作った口内炎の痛み止めのシートや錠剤識別方法などが企業化しています。

3つ目は厚生科学研究費を頂き、班長として薬剤師の職能を向上させる事業をスタートし、8年間に渡って現在も続いています。全国の多くの若手薬剤師をアメリカの臨床現場へ派遣し、6ヶ月間研修させ、アメリカからは臨床薬剤師を招聘して、全国基幹病院へ派遣し直接指導をして頂きました。この事業から多くの人材が育ち、日本の臨床現場での薬剤師の職能が拡大しました。

4つ目は「薬物依存についての研究」で目標達成型脳科学研究費という大きなグラント（約6.5億円）を5年間にわたり頂くことができ、班長として優秀な先生方とプロジェクトを組み、多くの成果が得られたことです。

多くの思い出を作って頂き、無事退職を迎えることができますのも、皆様方のご尽力のお陰と深謝致しております。

(なべしま・としたか)



名古屋大学の思い出

—ごみ全学一元化分別回収システム

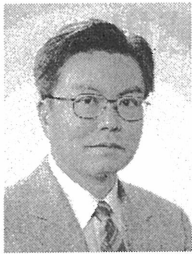
原口 紘丞（工学研究科・教員）

定年退職にあたり、名古屋大学の思い出について何か執筆するようにとのご依頼をいただきました。折角の機会でありますので、一筆啓上させていただきます。

私は工学部応用化学科で分析化学講座を担当して、18年間在職しました。ここでは専門の研究のことはではなく、学内の仕事としてやったことを紹介したいと思います。私は赴任以来、旧省資源エネルギー研究センター技術研究部長、廃棄物処理施設長、廃棄物専門委員会委員長を仰せつかり、実験廃棄物の回収・処理業務の学内整備を担当しました。ご承知のように、1996年頃名古屋市が廃棄物埋立地の不足から、藤前千潟に大型の埋立処理施設建設計画を発表し、世間は大騒ぎになりました。その頃私は名古屋市環境審議会の会長として、「環境先進都市名古屋の推進」を協議しておりました。このような社会状況においては、大学の廃棄物処理も例外ではなく、その学内整備は大学の社会的責任であると考え、廃棄物専門委員会で「ごみ全学一元化分別回収処理システム」の推進を協議しました。

病院を含めた全学構成員のご理解を得て、計画を実行するのは簡単なことではありませんでした。しかし、当時の世間の風潮と

松尾 稔総長（当時）の後押しで、現在のシステムを構築し、実施することができました。本学の皆さんにもあまり知られていないことですが、ここで裏話を披露しますと、当時の状況でも上記の計画を実行に移すには数年が必要で、時間がかかりすぎると考えられました。そこで、計画から半年で実施に移すために、教官、本部事務職員、そして生協からも2名参加していただき、約10名で、「全学ごみプロジェクトチーム」を組織しました。この作戦は大成功で、2000年4月から計画を本格的にスタートすることができました。生協の皆さんには、カン・ペットボトルの分別回収、資源古紙回収・リサイクル（トイレットペーパー製造）、そして学内広報などで精力的に協力していただきました。このごみの分別回収システムの構築と実施に対して、廃棄物処理施設に総長感謝状をいただいたことは懐かしい思い出となっています。生協の皆さんも学内構成員として、今後ともおいしい食事の提供とともに、名古屋大学の発展、学内環境整備のために御協力いただくことを願って、私の貴重な思い出の記とさせていただきます。（はらぐち・ひろき）



大学生協について思うこと

三井 斌友 (情報科学研究科・教員)

振り返ってみれば、大学教員として38年
間が経ち。この3月でめでたく「卒業」と
なるのを控えている日々であるが、大学生
生活協同組合（大学生協）とのおつきあいは
もっと長く、大学入学以来だから44年間
という長期間となることに改めて気づかさ
れている。この間、東京大学・京都大学・福
井大学そして名古屋大学と、どこでも大学
生協は身近な存在であり、頼りがいのある
組織であったと思っている。あまりにも身
近すぎて、その「依存度」がすぐには表現
できにくいほどである。

私が経験してきた各大学生協はそれぞれ
の特徴があったし、また過ごした時代が違
うので、その時代の条件、特に経済条件の
相違が如実に反映していたと感じている。
たとえば、学生として入学したときの東京
大学教養学部の生協購買部の店舗は、木造
の小さな建物の一角で、取り扱っている商
品も文房具が中心であって、現在のように
電気電子製品が主流というのは想像するの
も難しかった。書籍部も同様で、現在の「フ
ロント」のような瀟洒な、ちょっと腰掛け
て本を読むコーナーが隣にある店舗は、ま
さに隔世の感がある。具体的な統計資料は
持ち合わせていないけれど、大学生協の年
間売上高は当時と比べて（インフレがある

とはいえ）百倍にもなるのではないだろう
か。

また食堂事業には個人的にはもっと負う
ところ大きい。福井に赴任したときから
今日まで単身赴任生活を続けてきたので
（もうすぐこれは解消、万歳!）、毎日の食
事で大学生協にお世話になる比率が高い。
栄養バランスも考えてくれているから、あ
まり自分で悩まなくてよい。それから、80
年代前半くらいからだろうか、いわゆる
「カフェテリア方式」の食堂スタイルが大学
生協に普及して、ますます利用しやすくな
ったと思う。学会・研究会の懇親会を学
内で手軽に、しかも安い経費で用意でき
ようになったのも大学生協に負う。

残念であったことは、大学生協の組織活
動にはあまり参加できなくて（せいぜい総
代会を何度かしたくらい）過ごしてきたこと
であろう。特に名古屋では他にやること
が多すぎて、単なる利用者に留まってしま
った。しかし、名大生協が「名古屋大学平和
憲章」制定とその後の普及に果たした役割
は大きいし、生協らしさの発揮された側面
と思う。今後の皆さんの活躍を念じて、名
大を去りたいと願っている。

(みつい・たけとも)

名大職員の定年にあたり感想



横山 悠男 (医学系研究科・教員)



私は、名大工学部の技官として一年間勤務して、名大医学部の教官(助手)になった。

30数年間の名大職員で最初の大きな業績は、名大生協の印刷部で作ってもらった、自費出版『興奮現象の解析』1974発行である。この本は、イオンチャネルのゲート機構を取り扱ったものであり、イオンチャネルのリング状の極性基の配置の微小な変化により、イオン透過に対するポテンシャルバリアの形成、消滅による機構を物理学的に説明したものである。当時は現在と違い、イオンチャネルの高分子構造はほとんど分かっていなかったため、総ての説明が正しかったとはいえない。しかし、その本の出版を通して、高分子解析の電子顕微鏡のアイデアが出てきて、10数冊の本を出版して、現代科学技術者大辞典や日本人名録の初版に載せてもらえた。また、多くの物理学会での発表を通して、最近ではインターネットの「WHO」などに載せてもらっている。

私は、10年前にくも膜下出血という生命の危機に遭遇し、幸いにも完治して、定年に届こうとしている。この間にも20回近くの物理学会の発表を行え非常に幸いであった。このような回復は、日頃、名大生協の

昼食のおかげであると思っている。安い価格で多種類のメニューは食欲を旺盛にして体力の回復を助けてくれたと思っている。

名大という巨大組織の中で小さな歯車の一員として、少しでも良い研究発表と思い、本年3月末の物理学会発表に向けて、最後の奮闘中である。私の研究テーマはかなり広範囲に及んだが、最初は脳性理学から出発したが、前述のイオンチャネル問題にはいり、高分子構造の解析技術から工学に向かい、最近では安全な動力炉の技術の発表を繰り返している。また、光のレーザーを中性子ビームで行う誘導核反応を発表して、核燃料の増殖や金属資源の生産技術を発表している。そして、指向性の良い中性子ビームによる腫瘍のミサイル療法から遺伝子治療の技術に向かおうとしている。次回の発表は素粒子論的な観点からの新しい概念とその応用技術を説明する予定である。

私の物理学会での大きな発表の一つに、大局的非膨張定常宇宙論がある。これは、我々の宇宙は大局的に非膨張であり、宇宙を伝播する光が宇宙に存在する希薄な荷電粒子と相互作用することにより、赤方遷移と3度Kの宇宙背景輻射の形成と、仮想低質量粒子の形成が荷電粒子の雲と付随し、赤方遷移の相互作用になる事を説明した。

(よこやま・ながお)